

令和元年6月12日現在

機関番号：32608

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K18488

研究課題名(和文) アメリカ日系社会転換期における日系英語/日本語文学比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Japanese American Literary Works Written in English with Those Written in Japanese in the Transitional Period of the Japanese American Society

研究代表者

平石 妙子(Hiraishi, Taeko)

国立女子大学・国際学部・教授

研究者番号：80060705

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日系社会が転換期を迎えた1960年代から1990年代に至るまでに書かれた日系英語文学と日系日本語文学とを比較し、日系英語文学と日系日本語文学との差異や共通性を検証することを目的としたものである。アジア系アメリカ人運動やその後の日系社会の変化を再検証し、1960年代以後の日系英語文学および日本語文学を日系新聞の日本語欄や日本語文芸同人誌などに掲載されたさまざまなジャンルの作品なども含めて年代別およびテーマ別に分類し、分析したうえで、日系アメリカ文学の多様性や特異性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで日系アメリカ文学研究はあくまでも日系英語文学が中心で移民世代によって始められた日系日本語文学については別個のものとして捉えられる傾向がみられた。本研究はこのような状況を踏まえて、日系社会の転換期における日系日本語文学を日系英語文学と比較しながら、両文学の関係や差異を検討し、包括的な日系アメリカ文学研究の方向性を探るものである。アメリカ文学研究の「国際化」や「脱中心化」などが議論される中で、本研究を通して日系アメリカ文学の多様性や特異性を考察することは、日系アメリカ文学研究の新たな模索に連なる試みとして捉えることが可能であろう。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to compare the literary works of Japanese American writers written in English with those written in Japanese during the transitional period of the Japanese American society. After the examination of the literary works of various genres by Japanese American writers from the 1960s to the 1990s, I clarified the diversity and singularity of Japanese American literature by focusing particularly on the comparison of the Nisei writers with the Kibei Nisei writers.

研究分野：アメリカ文学、アメリカ文化

キーワード：日系アメリカ文学 日系日本語文学 帰米二世 アジア系アメリカ人運動 異人種間関係 越境

1. 研究開始当初の背景

1970年代に入って中国系や日系などを中心としたアジア系作家の初のアンソロジーが出版されるとそれまでアメリカ文学として認められていなかったアジア系作家が注目されるようになった。さらに、1980年代にはアジア系アメリカ文学に関する研究書も出版されて、本格的なアジア系アメリカ文学研究もスタートした。次々と登場するアジア系作家の活躍は目覚ましく、アジア系アメリカ文学作品は広く読まれるようになり、中にはベストセラーとなる作品も登場した。特に1965年の改正移民法以後、複数の国境を越えてアメリカにやってくるアジア系移民の増加もあり、アジア系移民の多様化や混雑化が進むとアジア系アメリカ文学もより多彩になる。

以上のような状況を背景にアジア系の中でも長い歴史を持つ日系アメリカ文学に関しては、1980年代以後、研究も活発に行われるようになり、フェミニスト、ポストコロニアル、トランスナショナルなどの新しい批評理論に基づく研究も提示されるようになった。このような日系アメリカ文学研究の広がりや進展の中で見逃されがちであったのが一世や帰米二世による日系日本語文学の歴史である。初期の日本人移住者が増えると、日本語新聞に短歌や俳句が掲載されるようになり、文芸同好会なども作られるようになると、やがて、「移民地文芸」として発展した。1930年代に入ってからは、成長した二世による文芸活動が日本語新聞の文芸欄や同人誌などで行われるようになった。日本の軍国主義による侵略拡大に伴い、日系移民への排斥感情が高まる厳しい時期に書かれた作品には、当時の二世の心情や状況が様々な形で反映され、日系移民の歴史が刻み込まれたものであった。特にこの時期に文芸活動を始めた帰米二世の場合、アメリカで生活しながら、自らを表現する言語として日本語を選んだ背景には複雑な思いや葛藤があったように思われる。それらを読み取るとことは日系アメリカ文学の多様性や異質性を探るうえでも重要であろう。

しかし、従来、日系アメリカ文学を含むアジア系アメリカ文学研究は、その初期から研究対象は英語で書かれたアジア系作品であった。エレイン・H・キムによる『アジア系アメリカ文学 - 作品とその社会的枠組み』(1982)は画期的な研究書であったが、一世の川柳や俳句、短歌などが英訳されて紹介されているものの、日本語による初期の文芸活動についての説明は与えられていない。また、その後、発表された日系アメリカ文学の歴史を辿ったスタン・ヨギによる論稿「日系アメリカ文学」(1997)においても同様で、英語で書いた3人の一世作家が紹介されているが移民世代によって始められた創成期の日本語文学の軌跡については取り上げられていない。また、二世文学についても、英語の作品が対象であり、帰米二世による文芸活動に関しては言及されていない。言語的、資料的な制約があることは確かであるが、長い歴史をもつ日系日本語文学の軌跡に触れないことは、包括的な日系アメリカ文学としては不十分であると思われる。

一方、日本の日系アメリカ文学研究においては、日系日本語文学の先駆的な研究が日系アメリカ文学への関心とともに進み、長い間、埋もれていた作品の発掘や収集という重要な研究活動が着々と行われ、日系文学の通史『日系文学の研究』(1985)も出版され、日本語文学の作家や作品が紹介された。さらに、近年では日系日本語文学の歴史と変遷を辿った新たな通史が出版され、日系アメリカ文学研究の更なる深化が期待されている。

本研究は以上のような背景と先行研究を踏まえて、日系アメリカ社会が転換期を迎えた1960年代から1990年代までの日系アメリカ文学と日系日本語文学とを比較することを目的として始められたものである。この比較・検討を通して、現在に至るまで継続されている日系日本語文学が日系アメリカ文学の現在にどのように連結されているのか両文学の関係を考察することによって、アメリカ文学の「国際化」や「脱中心化」が指摘されるようになった現在の状況に即して、日系アメリカ文学研究の枠組みを広げることも可能になると思われる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日系英語文学を日系日本語文学と比較することで両文学の関係を探り、日系アメリカ文学の包括的な研究を目指すことにある。日系日本語文学はすでに述べたように従来のアメリカを中心とした日系アメリカ文学の研究においては軽視されてきた。だが、移民世代によって始められた日系日本語文学の活動が日系英語文学に与えた影響は見逃せない。例えば、日系英語文学のパイオニア的存在である二世作家が創作をはじめた背景を考えても明らかである。二世の詩人トヨ・スエモトは母から俳句や短歌について学び、自身の詩作において影響を受けたことをエッセイで明らかにしており、詩を書くようになった背景には自らも短歌を書いていた母の存在があったとしている。ヒサエ・ヤマモトも「17文字」(1949)において農作業の合間に一心不乱に俳句を作る母の姿が二世の娘を通して描かれ、移民世代において日々の生活のなかで俳句や短歌を作ることが厳しい現実を乗り越える手段になっていたことが分かる。それとともに母の創作への情熱が娘にもすくなく影響を与えたことが察せられ、二世文学の開花にはこのような移民世代の文芸活動が与えた影響は見逃せない。

本研究はこのような点を踏まえて、アジア系アメリカ人運動や補償請求運動が始まり、日系社会が転換期を迎えた1960年代から1990年代に至るまでの期間に書かれた日系英語文学と日系日本語文学との比較を行う。時代を限定したのは以下の理由によるものである。これまでの日本語文学研究においては創成期から強制収容時代までの文芸活動が詳細な調査のもとで研究が蓄積されてきたが、戦後、特にアジア系アメリカ人運動や補償請求運動などで日系社会が変化する時期の日本語文学の活動についてはまだ十分な研究がなされていない。この時期はすでに述べたように日系英語文学が評価され、トシオ・モリやヒサエ・ヤマモトなどをはじめとする二世作家の作品集も出版され、研究されるようになった。さらに、この転換期にはアメリカ社会の変化の影響を受けた新しい世代の作家として三世のシンシア・カドハタやカレン・テイ・ヤマシタらが注目されるようになり、従来の日系文学とは異なった新しいテーマや語りの方が示された点で重要な時期である。

一方、この時期の日本語文学についてみると強制収容後、生活の立て直しで一時、文芸活動を中断していた帰米二世が活動を再開させた。この時期に活発な活動を行ったのは加川文一や山城正雄、藤田晃らが中心となったグループで1965年に日本語文芸同人誌『南加文藝』を発行した。この同人誌にはやがて戦後移住者も参加することでメンバーも多彩になった。日系日本語文学が現在も同人誌も発行されて継続している現状を考えると戦後の日系アメリカ文学において『南加文藝』の果たした役割は大きい。

以上のように、本研究では、日系英語文学と日系日本語文学を日系アメリカ社会の転換期に設定して読み直し、両文学の接点や差異を考察して日系アメリカ文学の全体像に迫る試みとしたい。

3. 研究の方法

まず初年度は、日系英語文学については、1960年代から70年代に至る期間に書かれた主として二世作家の作品を読み直した。日系日本語文学については、この時期に発行された『南加文藝』の作品をジャンル別、テーマ別に分類しながら作業を進めた。さらに、カリフォルニア大学ロサンゼルス校にあるリサーチ・ライブラリーでマイクロフィルム化された日系新聞に掲載されている二世作家のエッセイや短編、および日本語欄に掲載されている俳句や短歌、随想などを収集した。同時に1960年代から70年代までの日系社会の状況なども日系新聞の記事を通して検討した。さらに、ハワイで行われた国際会議に参加して、日系アメリカ人の歴史および文学の研究者との意見交換も行い、本研究について示唆を与えられた。

本研究の最終年度においては、1980年代から90年代に至る期間に発行された日系英語作家による主要作品を再読して、収容所体験を持たない三世の作家たちによって提示された二世文学との差異や日系アメリカ文学の新たな要素を検証した。また、日本語文学については前年度、読み終えることができなかった1975年代後半から最終号までの『南加文藝』に掲載されている作品を読み、戦後移住者の参加が与えた影響や変化などを分析した。また、現在まで継続して発行されている日本語文芸同人誌『平成』(1989-)や『新植林』(1990-) (創刊時のタイトルは『移植林』)についても、どのような活動が行われているのか調査を行った。

最終年も引き続き、カリフォルニア大学リサーチ・ライブラリーにて1980年代から90年代までの期間における日系新聞の英語欄、および日本語欄に掲載されている作家の作品や俳句や短歌、随想などを収集した。同時にこの時期の日系アメリカ人を取り巻く社会的状況についても調査を重ねた。この後、ハワイ大学にも赴き、ハワイの日系日本語文学の歴史や研究について調査を行うことができた。このような作業をしたうえで、最終年度は収集した資料や作品解説などを踏まえて、日系英語文学と日系日本語文学との関係について分析を進めた。

4. 研究成果

本研究で対象とした1960年代から90年代にかけての時期は日系社会が世代交代により変化し、若い三世が積極的に政治的、社会的活動に参加した。公民権運動に影響を受けたアジア系の若い世代がアジア系アメリカ人運動をスタートさせ、アジア系としての連帯をアピールし、民族の枠を超えたアジア系としてのアイデンティティを主流社会に向けて積極的にアピールするようになった。このような流れに応じて、日系詩人のローソン・F・イナダやジャニス・ミリキタニはメッセージ性を含んだ力強い詩を発表する。また、それまで長い間、読まれることもなかった一世や二世作家の作品を発掘する作業も精力的に行った。例えば、ミリキタニは『日系米人文芸集 歩み』を1980年に出版した。これは一世から四世までのさまざまなジャンルに及ぶ作品を編集したものであり、日本語で書かれた一世の短歌や詩、随筆なども英訳とともに掲載され日系アメリカ文学の最初のアンソロジーとなった。

さらに、80年代に入るとアジア系アメリカ文学の開花が本格的に始まるが、日系英語文学においては強制収容所の体験を持たないカドハタのような新世代の作家が、空間的にも

精神的にも移動や越境を重ねる日系家族の物語を描き注目された。戯曲では、米軍兵士と戦争花嫁の娘であったヴェリナ・ハス・ヒューストンが4人の日本人戦争花嫁を描く『ティー』(1983)で多人種・多民族社会アメリカで混雑化が進む日系アメリカ人の新たな状況を提示した。

一方、この時期の日系日本語文学においては第二次大戦中の強制収容所においても中断せずに文芸活動を続けていた帰米二世が中心となって戦後の生活の再建が一段落したこの時期にカリフォルニアで文芸活動を再スタートさせた。それが1965年の文芸同人誌『南加文藝』の創刊である。主要な編集委員としては、トゥーリレイク収容所で活動を共にしていた加川文一、山城正雄、藤田晃らがいた。創刊号の「発刊の辞」で加川が述べているように、この同人誌の目的は、カリフォルニアにおいて日本語で創作を行っている日系人にとって発表の場を提供することにあった。

『南加文藝』に掲載された作品のジャンルは詩や短編、短歌や俳句、エッセイなど多岐にわたるものであり、アメリカにおける日本語文学活動の展開を知るうえで貴重な資料でもある。全般的に技巧も稚拙で素人の域を超えていないものが多いが、藤田や山城のように鋭い感性と文学への情熱が示されている書き手もいた。『南加文藝』は考えの相違も生じて山城のように途中で同人誌から離れたものもいたが、戦後移住者の加入もあり、1985年まで30年間もの間、日本語で創作をする人々にとって貴重な場となった。

以上のごく簡単に1960年代から90年代にかけての日系英語文学と日本語文学の状況を述べたが、この時期に書かれたそれぞれの文学の作品を比較すると両文学の差異がより顕著に認められる。この時期は先に述べたように、日系英語文学の開花期でもあり、日系英語文学の担い手たちは、アメリカ社会において人種的マイノリティとしての周縁性を意識し、苦悩しながらも、日系アメリカ人としての意識を強く抱いていた。例えばヒサエ・ヤマモトの場合、アメリカ社会における人種的マイノリティとしての周縁性を特に強制収容の体験を通して思い知らされたことは、エッセイやインタビューなどで暗示されている。だが、その一方でヤマモトは周縁的な場所に留まるのではなく、公民権運動や平和運動にも参加し、アメリカ社会の変化を希求した。ヤマモトは移民世代の両親を通して知らされた日本的な伝統や文化が自身に影響を及ぼしたことを認めつつも、アメリカ社会に根ざした日系アメリカ人として新たな生き方を模索したのであり、彼女の作品にはその経験が様々な形で反映されている。

一方、この時期の日本語文学活動の中心的存在であった帰米二世作家の場合、アメリカ社会との関係はより複雑である。ヤマモトとほぼ同世代である山城正雄を例にとってみよう。山城は、『南加文芸特別号』(1986)に掲載された「アメリカに生きるとは」というエッセイで「地元人」としてアメリカで生きてきた自身の立場の曖昧さに触れ、その孤独と不安を明らかにしている。この点は、『帰米二世 解体していく「日本人」』(1995)でさらに詳細に描かれる。山城は1916年にハワイで生まれたがその後、両親の相次ぐ死で姉とともに1924年には両親の出身地であった沖縄に移住した。その後、1936年にハワイに戻り、さらにロサンゼルスに移り住んで教育を受け、戦後、日本に帰国することはしなかった。『帰米二世』ではそのような移動を重ねた山城がハワイにも沖縄にも自身の故郷を見出すことのできない喪失感を率直に吐露している。とりわけ父の残した土地整理をするために沖縄を再訪した時の様子が描かれる「父母の墓」では、山城の沖縄を観察する眼差しに日本とアメリカの挟間で揺らぐ彼の立場の複雑さが繰り返りかえし示されている。沖縄はもはや山城にとって故郷ではなく、故郷とは「幻想の世界」としてしか存在しない場所であると述べて、深い喪失感に陥ってしまっている。

このような山城のディアスポラの感覚に触れると「帰米二世」が従来の固定化された定義やイメージでは十分に説明できない存在であることが示唆される。帰米二世の中には、山城のようなハワイや沖縄からさらにアメリカ本土へという複数に及ぶ場所の移動を重ねた帰米二世もおり、アメリカで生活をしながら、日本語で書くことを選んだ背景にはそれぞれ異なった社会的、文化的越境の体験があったことが察せられるからである。山城が自身を「地元人」という言葉を用いて説明する点にアメリカでも日本においても他者化される山城の周縁性が認められる。山城の例が示すように、いわゆる「境域の文学」と呼ばれる日系日本語文学の歴史において重要な役割を果たした帰米二世が決して一元化される存在ではないことを踏まえた上で、それぞれの経験に即して作品を歴史的、社会的文脈に即して丹念に読み解く必要があるだろう。そのような試みは、ひいては日系アメリカ文学研究の枠組みを捉え直す契機にもなり得るだろう。これらの点については、最終年度において、検討半ばで終わったため今後も継続して研究を進めたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件) 平石(稲木)妙子「日系アメリカ文学の変容とヒサエ・ヤマモト」『共立国際研究』36号、2019、査読無し、75-87。

〔図書〕(計 1 件) 平石(稲木)妙子 金星堂『ヒサエ・ヤマモトの世界』2019、257 ページ。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。